

色とりどりの記憶とねがい

# イマコココ

ひとりひとりのつながりをたどれば、地球全体につながっていきます。イマココから発信する「色は匂へど長者町カルタ」。色とりどりの記憶とねがいが、まちのひとりひとりから紡がれていきます。



イ  
マ  
コ  
コ



発展へのちから

# 朝 星 夜 星

朝は星が消えないうち  
から、夜は星が出るま  
で働いた時代。長者町  
で商売をする人は、い  
つか自分の店をもとう  
と、柳ごおりに品物を  
いっぱい詰め、仕入れ  
先と長者町を何往復も  
しました。



朝  
星  
夜  
星





一刻も早く救援へ

# 伊勢湾台風

昭和三四年、「伊勢湾台風」は、一夜にして東海地方各地に甚大な被害をもたらしました。被害の少なかったこのまちの間屋は、社員総動員で被災地に救援へ。炊き出しは白くて大きな握り飯でした。



伊勢湾台風



商いの七つ道具

# 五つ玉

長者町の商いにはかせない大福帳、帳面、柳ごおり……。なかでも中国から伝来してきた姿を留める五つ玉のそろばんを、商いを象徴する道具として今も大切に使っている人がいます。



五

つ

玉



希望を織りこむ糸たち

# 糸 タ ン ス

糸タンスは、糸と糸が  
すれて痛まないように  
するための収納用具で、  
たくさん糸がしまえ  
ます。長者町には昔洋  
裁学校があり、生徒は  
この糸タンスから、自  
分の布に近い色の糸を  
選んで買いました。



# 糸 タ ン ス



来た人みんなゑびす顔

# ゑびす祭り

以前の長者町は商い専門のまちで、一般の人を寄せ付けない雰囲気がありました。しかし、みんなに長者町を知ってもらおうという想いから、多くの人をまちに呼び込むお祭りがつくられました。



えびす祭り





昭和の記憶

# 縁台と満月

仕事が終わる、風呂からあがると各家通りに縁台を出します。暑い最中、打ち水をして満月の下、大人も子どももご近所一緒になつて将棋やおしゃべりを楽しむ。そんな温かい暮らがありました。



縁台と満月



一坪シヨップのさきがけ？

# かいかん

「かいかん（会館）」は  
高さ五十センチメートル、  
広さ三坪程の台  
上で商売できるよう  
なっている建物で、  
長者町に昔たくさん  
ありました。二階に  
はお客さんが泊ま  
れる部屋もありま  
した。



か  
い  
か  
ん



# まちのすき間をみんなの場所に 会 所

かつてはこのまちのど  
の街区の真ん中にも、  
寺や神社がありました。  
この場所は「会所」と  
いい、日常的に人々が  
行き交う場所でした。  
今も会社の行き帰りに  
会所を訪れ、拜んでい  
く人が多くいます。



会

所



自然の力を活かす

# 風の道

名古屋都心部にあつて、  
暑さの厳しいまち。し  
かし、夏季に吹く海風  
の通り道があると解明  
されてきています。緑  
と水の備えで風を呼び  
込めば、まちなかで風  
鈴の音が聞こえてくる  
ことでしょう。



風  
の  
道





まちなかの会議室

# 喫茶文化

このまちの喫茶店は、  
くつろぎの場としてだ  
けでなく、情報交換の  
場としての役割を担っ  
ています。まちで働く  
人は、毎朝出社前に喫  
茶店に立ち寄ります。  
その分、早起きしてい  
ます。



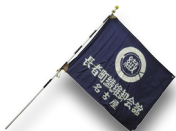
喫茶文化



よりあう糸のような結びつき

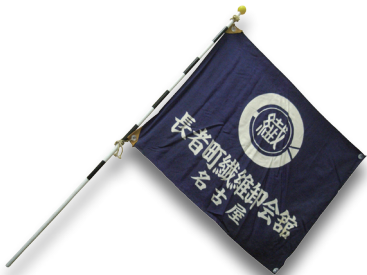
# 組 合

昭和二十年代なかば、  
長者町の繊維問屋は同  
じ職業の人の結びつき  
を強くし、まちを活気  
づかせるための組合を  
つくりました。今でも  
それは、異業種の風を  
取り込みながら続いて  
います。



組

合



# まちで暮らしを支える くらしごと

長者町は下階が店舗で  
上階が住まいの四階建  
ての問屋が多くあり、  
従業員も主人も共に暮  
らしていました。給食  
制度などまちで働く人  
の暮らしを支える仕組  
みがある、生活と仕事  
の共存のまちでした。



くらしと



ここが中心

# グランドクロス

北には城、東には塔、  
南には科学館と美術館、  
西には高層ビル群。ま  
ちの交差点に立てば、  
名古屋を象徴するモ  
ニュメントの数々を見  
やることができます。  
このまちは、グランド  
クロスの中心です。



# グランドクロス





# 景色

高層ビルが建ち並ぶ大通りから一步中に入ると、ゆったりとした昔ながらの雰囲気になります。そこに交じるのは、新しいお店や人の顔。このまちは、懐かしさと新しさに彩られています。



景

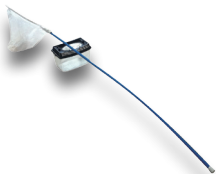
色



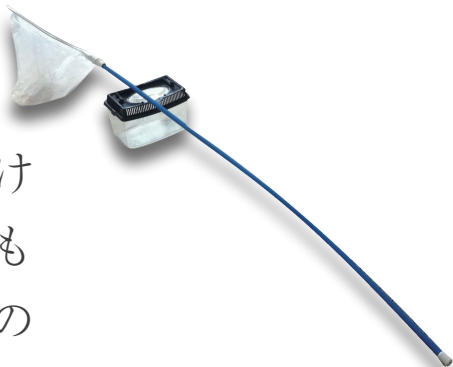
ひみつの経路

# けもの道

敷地いっばいに立ち並んだビルとビルの間は幅約八十センチメートル。今から三十年くらい前の子どもたちは、そのすき間を「けもの道」とよび、鬼ごっこや虫とりなどをして遊んでいました。



け  
も  
の  
道



まちに帰ろう

ごはん

仕事の仲間、家族、友人、ひとりでも行ける飲食店が、まちにはたくさんあります。ひとり家で食べるのもいいけれど、母のような主人のやさしい味は「おかえり」と迎えてくれます。



ご

は

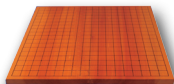
ん



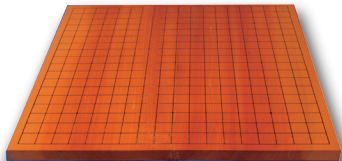
四角四面は昔から

# 碁盤割

名古屋のまちは、碁盤の目のように四角い町割になっています。江戸時代から脈々と受け継がれ、四〇〇年の城下の歴史を今に伝える「碁盤割」の特徴は、このまちに暮らす人々の誇りです。



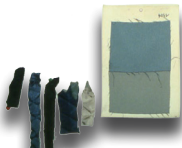
碁盤割



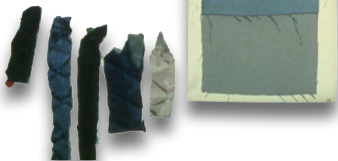


# まちの記憶を今に伝える 痕 跡

四階建てのビルの壁に残る、家型の跡。外壁に付いた、電気のスィッチ。内壁に貼られた、華やかな模様のハギレや名刺。このまちを歩いていると、様々な暮らしの痕跡に出会います。



痕



跡

ゴミの山は宝の山!?

# 梱包

「梱包材を燃やして焼き芋をよくやったなあ」  
古くからまちの間屋で働いてきた人の想い出です。路上で焼き芋を囲めばよその会社の人も子どもたちも集まってきた、そんな風景がありました。



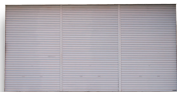
捆



包

# 灰色よりもカラフルへ シャツ ター

様々な彩りに満ちていたこのまち。繊維業の停滞とともにシャツターを下ろしたままの店や空地が増え、次第に色が失われていきました。そして今、彩りを取り戻す新しい動きが始まっています。



シャッター



みんなの財産

# 城

金のシャチホコがト  
レードマークの名古屋  
城天守閣は、加藤清正  
の指揮により美しい石  
積みがなされました。  
現在でもまちの人は、  
「家からお城が見える」  
ことを嬉しそうに語り  
ます。





城



筋を通した人間関係

# 筋と通り

このまちを東西に走る  
「筋」と、南北に走る  
「通り」の名前には、昔  
の町名が付いています。  
町内会は筋と通りごと  
におかれ、同じ筋・同  
じ通りに店を構えてい  
るといっつながりを大  
切にしています。



# 筋 と 通 り



花の長者町の一時代

# 織 維 街

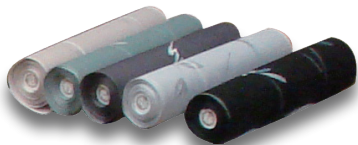
長者町は、江戸時代は  
城下町として賑わって  
いました。戦後の繊維  
不足を機に、繊維のま  
ちをつくろうとまちの  
人が結束し、長者町は  
東京の日本橋、大阪の  
船場と並ぶ日本三大織  
維街となりました。



絨

維

街



手の温もりと誇り

# 創業天保十一年

城下の歴史息づくこの  
まちには、寺や神社以  
外にも、江戸時代から  
続く店があります。創  
業天保十一年の升半茶  
店は茶どころ名古屋の  
お茶の老舗として、ま  
ち内外の多くの人から  
親しまれてきました。



創業天保十一年



地域一体 公立学校の先駆け

# 第一義校

「義校」とは、名古屋で  
教育熱心な市民と有志  
からの拠金で設立され  
た学校のこと。明治四  
年設立の第一義校は、  
このまちにあった菅原  
小学校です。全国に誇  
れる、地域で子どもを  
育むしくみです。



第一義校





遊びと学びの達人

# 旦那衆

置屋や茶屋から、寺社  
仏閣まで。様々な方面  
を遊び歩く旦那衆は、  
遊びを通して自身の教  
養を高め、まちの文化  
も支えていました。こ  
のまちの粹な旦那衆の  
基本スタイルは、羽織  
姿に帽子でした。



旦  
那  
衆



長者町のミツはどんな味？

# 長者蜂

都会の真ん中でも長者  
蜂は蜜を集めます。飛  
行圏内に名古屋城、白  
川公園、久屋大通公園、  
下園公園。加えて「長  
者町の味」の願いをこ  
めて、蜂と道行く人の  
ために花を育てる輪が  
広がっています。



長  
者  
蜂



全国に届け！

# 長者町新聞

昭和二六年に創刊された、名古屋長者町織物協同組合の機関紙です。組合員各社の卸売価格から、まちでのイベント紹介まで、全国の小売店に向けて「長者町の便り」を発信し続けています。



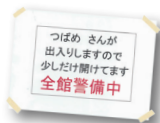
# 長者町新聞



まちは大家族

# つばめの の巣

「まちは大家族ですから、助け合うのが当たり前なんです」とまちの人は言います。会社の壁を越えての協力関係もありますし、「つばめさん」を大切な家族として受け入れる優しさもあります。



つばめの  
巣

つばめ さんが  
出入りしますので  
少しでも開けてます  
**全館警備中**



# 都市の花

小さくとも凛と咲く

都会の喧騒の中でふと  
目に留まるスマレやカ  
タバミ。小さなかわい  
らしいものを「守りた  
い」と思う、そんなさ  
さやかな幸せを、コン  
クリートの割れ目から  
たくましく咲く野草は  
教えてくれます。



都市の花



時間と空間の工夫

# 問屋の吹き抜け

かつての繊維問屋に  
あった吹き抜けの空間。  
二階の吹き抜け周りに  
は、棚に品物がずらり  
と並び、上げ下ろすた  
めの滑車が付いていま  
した。品物も、時には  
子どもも、吹き抜けを  
行き来しました。



問屋の吹き抜け



伝説の町名

# ながものまち

「長者町（ちょうじゃまち）」はまち丸ごとの引越、清洲越しで移ってきた町名ですが、どういう意味でしょうか？昔、「長者町」は「ながものまち」と読まれていた、という説もあります。

長者町

# 長者所

ながものまち

自転車で どこまでも

# 那古野台地

このまちは、高台で水害に強い那古野台地の上にあります。繊維業が盛んな頃には、自転車に積めるだけ荷物を積み、一気に下って名古屋駅まで荷物を送り届ける光景が日常的に見られました。



那古野台地





まちの未来を宝船に乗せて

# 八福神

まちのありたき将来像  
を「八福神」に託して  
楽しく構想しているま  
ちの人や、まちを好き  
で集まってくる人がい  
ます。まちが、働く・  
住む・楽しむ、様々な  
魅力が混ざり合う宝船  
となりますよう…。



八  
福  
神



チャレンジする人のまち

# ベンチャー

戦後一坪から商いを始めた問屋がひしめき合い切磋琢磨してきた様子を「会館」の札から想像することが出来ます。江戸時代にはじまりそしてこれからも、チャレンジする企業起こしのまちなのです。



ベンチャー



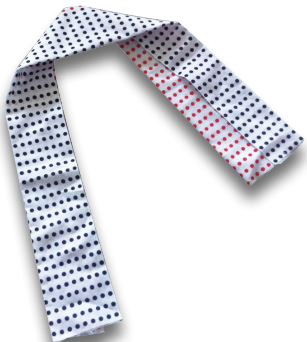
長者町の挨拶は

「まいど」

長者町では朝夕の時間帯に関係なく、挨拶は「まいど」。たった三文字の短い言葉ですが、たんなる挨拶としてだけでなく、お互いにもつと深い意味を込めて交わすこともあります。



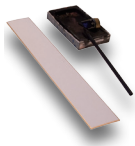
「まいど」



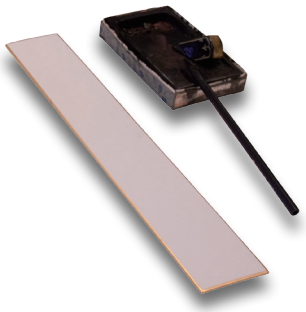
「うた」に託したまちの意志

# まちづくり憲章

五七五七七、まちの人  
たちがリズムミカルに  
詠ったまちへの想いは、  
一六八首全てがキラキ  
ラしていて、人のここ  
ろに届きます。世界初  
の短歌による「まちづ  
くり憲章」が、このま  
ちから生まれました。



まちづくり憲章





未知のまちを喚起する

# まちとアート

長者町はアートによる  
まち育てをすすめています。  
まちの日常の営みの中に、非日常のカタチがあらわれると、  
まちの魅力が湧き出てきます。  
アートは未だ見ぬまちの魅力を発掘してくれます。



まちとアート



尾張にひらく大輪の華

# 宗 春

徳川宗春は、將軍徳川吉宗の厳しい儉約令に真っ向から反対した尾張藩主です。自ら華やかで奇抜な衣装をまとい、芝居や祭りといった庶民の楽しみを奨励して、尾張のまちを活気づけました。



宗

春



長者町といえばこれ！

# 名物

このまちの名物と言え  
ば、何が思い浮かぶで  
しょう？歴史あるもの  
から最近のもの、中に  
は空を飛んだ「長者町  
名物」まで。探してみ  
ると、自分だけの名物  
に出会えるかもしれま  
せん。



名

物



城も見えるし 近所話も

# もの干し台

通りに面する表は商売  
の顔、裏は生活の顔。  
そんな昭和の長者町の  
代表的風景は、井戸端  
会議ならぬもの干し台  
ごし会議。建物がそん  
なに高くない時代、名  
古屋城を背景に、ご近  
所話がはずみました。



もの干し台

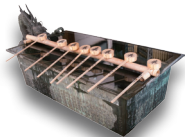




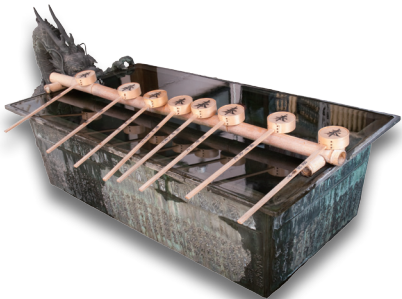
全て灰となりました

# 焼け野原

第二次世界大戦で一面  
が焼け野原となつてい  
く姿も、復興エネルギー  
満ち溢れる名古屋の中  
心でひたすら働く人々  
の姿も、焼け残った福  
生院の龍の水盤は今と  
同じ場所で見つめてき  
ました。



焼  
け  
野  
原



古くて渋いまちの語り部

# 四つ角

まち角ではのぼのみんなを見守っていた、今はなき遠山ビル。四つ角はまちの顔です。建物の表情、スケール感、緑、人の営みのにじみ出し。個性的で愛されるまちの表情を育みましょう。



四  
つ  
角



「このまちが好き」

# わたしのまち

「このまちの人柄が好き」  
「歴史に想いをはせるとわくわく」  
「知恵と才覚のまち」など、まちへの誇りや希望を様々な人と重ね合わせていくことは、どんなまちが好きになるしかけです。



わたしのまち

